



表紙

小林英樹 色を気の向くままに置いて行くこと

表紙絵の解説

小林 英 樹

音楽を奏でるように色を置いていく。油絵具の油を少し抜いてテレピンで薄めて水彩のように置いていく。左手に細い豚毛の筆を数本握り、パレットの上にある絵具を適当に選んでは置いていく。同じような色を続けて塗った後、気分の赴くまま、新しい色を置いていく。イメージをもつとうまくいかないから、ほとんど何も考えずに、できるだけ感覚を解放し、いい感じに進められたときはまずまずの出来だが、邪念が入ったり、イメージが先行したりすると、必ず失敗する。何通りかの和紙に試みたが、書道の練習用の厚手の和紙を使うとうまくいった。この行為は十数枚の「完成作品」を生み出せたが、二、三日で終わってしまった。それは、よかったときの記憶が自由な進行を妨げ、よかった効果を模倣しようとする気持ちだが、最終的に、集中力を奪ってしまったからだ。それはあくまでもその程度の作品でしかないにしても、詩情たどよう心地よいものであった。飾るにはいいと、もらい手が多く、手元には数枚しか残っていない。乾性油がしみ出ているが、和紙は心配を裏切って酸化による破損はない。去年の表紙に使った作品のタイプライター用紙にほんのわずかに滲んだ乾性油も、紙をほとんど傷めていない。不思議だ。三〇数年が経つが、意外に強いことが分かる。乾性油は完全乾燥してしまえば、そこから先は酸化が進まないからなのだろうか。1977年、大阪に移って二年目のものである。ミクストミューズの表紙には、遠い過去の懐かしい軽い感じの作品を使わせてもらっている。